

2025 年度中東☆イスラーム教育セミナー

タイトル：「イスラームは恐れの対象なのか？—中央アジア近現代史から考える」

講演者：野田仁（東京外国語大学 AA 研）

開催日：2025 年 9 月 19 日

本講義は、新疆（Eastern Turkestan）の現状を受けて、その問題の淵源を探るべく、歴史的背景と中国政府側の公式見解を整理し、説明することを目的としていた。

主な問いは、以下の 2 点であった。

- ・中国におけるイスラームへのまなざし、とりわけ警戒心は、単なるイスラモフォビアなのか？
- ・歴史的背景からその構造を読み解けるのかどうか

歴史的には、ロシア帝国における反イスラーム的言説にさかのぼって考える必要がある。というのも、帝国内のムスリム（中央アジアも含む）に対して、「狂信性」や「扇動者」イメージが形成されていたからであり、さらにそれらは、汎イスラーム主義・汎テュルク主義への警戒と結びついていたからである。

そのような過度ともいえる警戒心は、中央アジアにおける 1916 年反乱に際して、多数のムスリムが中国領内に逃亡したことにより、中華民国側、とりわけ新疆省の長であった楊增新にも共有されたと考えられる。

他方の中国側では、清朝期以来のムスリム勢力への敵対心があったことはたしかである。この文脈の中では、20 世紀前半における二度にわたる独立政権の樹立の試みは、当局の側から見ると反体制的なものとなるかもしれないが、ムスリムのナショナリズムとは区別して考える必要があることも事実である。

現代中国においては、細かな議論はここでは避けるが、宗教の中国化に代表されるような少数民族、とりわけ国内のムスリムに対する政策の展開は、多分に、分離主義につながりかねない汎イスラーム主義・汎テュルク主義への警戒を反映しており、本講義の試みである、歴史的に遡って考察することには十分に意義があろう。